平成27年度　佐賀県立武雄青陵中学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
高い志と未来を切り拓く力をもち、地域や国際社会の発展に貢献できる、人間性豊かな人材を育成する。	学習指導方法の工夫・改善

達成度　A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3　目標・評価

①　授業の改善

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	教員の授業力向上	・生徒の高校卒業後の進路目標達成に向け、中高6年間を見通した教科指導力、授業力を向上させる。	・武雄高校との授業研究会を通して、中高6年間を見通した教科指導を実践する。 ・他校の授業を年間1回以上参観し、授業力の向上を図る。 ・授業研究会（含ICT利活用）を年間2回以上実施する。 ・生徒の学力推移を的確に把握し、授業改善に生かす。 ・学力推移調査の成績分析会を各学期に1回以上実施し、授業の改善に生かす。	B	全教科にわたる武雄高校との相互授業参観および教科研究会を通して、中高6年間を見通した教科指導についての共通理解を図ることができた。職員へのアンケート調査でも、「中高6年間を見通した教科指導を実践できたか」との問いに対して、「できた」または「概ねできた」との回答が86．3%と高い数値を示し、また、「生徒の学力推移を的確に把握し、授業改善に生かせたか」に対しても、「できた」または「概ねできた」との回答が77．2%であった。しかしながら、学力推移調査の成績分析会は1学期に1回しか開催できず、校内での授業研究会や他校への授業参観も多くはできなかった。こうした点が今後の課題である。	教員の更なる授業力向上を目指し、今年度、年度途中から時間割の中に教科会議の時間を設け、その中で授業内容や授業進度、テスト問題の検討なども行った。この点は来年度以降も続けたい。また、学力推移調査の成績分析会については、結果が戻ってきたら必ず開催するよう日程調整し、生徒の学力把握と授業改善に生かしたい。さらに、他校への授業参観や校内での授業研究会についても今以上に奨励したい。
教育活動	●国語、社会、数学、理科、英語、音楽、美術、保健体育、技術家庭の学力向上	①　学習に目的意識を持たせる「めあて」の提示	毎時、及び、小単元毎に提示する。	学期に1回授業評価を行い、その中で、「めあて」によって学習意欲が持てたかどうかを把握し、改善に生かす。	A	職員へのアンケート調査では、「毎時間の授業や小単元毎に「めあて」を提示できたか」との問いに、90．9%が「できた」または「概ねできた」と回答している。また、生徒へのアンケート調査でも、84．7%の生徒が学習の「めあて」が「わかった」または「だいたいわかった」と回答しており、ほぼ目標は達成できたと考えられる。	今年度、生徒による授業評価は1回しかできなかった。来年度は授業評価の回数を増やし、その中で、「めあて」によって学習意欲が持てたかどうかを把握するとともに、更なる授業改善に生かしたい。
		②　学習集団を本気にさせる「高レベル課題」の設定	上位層の2割の生徒が本気にならないと10分以内では解けないレベルの課題を出す。	課題を解決する様子と時間を計測し、設定レベルを調整していく。	B	職員へのアンケート調査で、「学習集団を本気にさせる「高レベル課題」を提示できたか」との問いに、72．7%が「できた」または「概ねできた」と回答している。目標は概ね達成できているが、学習集団をより活性化させ、本気にさせるためには、この割合をもう少し上げる必要がある。	個々の生徒だけでなく、学習集団としての生徒の状況を的確に把握し、学習集団を本気にさせるような「高レベル課題」の設定について研究していく。
		③　全員が学習目標を達成できる「課題解決活動」の設定	個別演習、グループワーク、『学び合い』、アクティブラーニングなどの多様な展開を、学習集団と課題を考慮して設定する。	授業では学習集団の全員が基礎事項を習得する意識を持つことを生徒に求め、教師の準備した解決のための展開に集中させ、良い点をほめ、学習集団を育てていく。	B	職員へのアンケート調査で、「学習目標達成のための「課題解決活動」の時間を設定できたか」との問いに、72．8%が「できた」または「概ねできた」と回答している。また、生徒へのアンケート調査では、「授業中の学習活動に積極的に参加できたか」との問いに、93．8%が「できた」または「だいたいできた」と回答しており、目標は概ね達成できている。	個別演習、グループワーク、学び合い、アクティブラーニングなど、学習集団や課題に対して適切に展開できるよう、さらに研究していく。
		④　個別に最大限対応する「学習環境づくり」	五感別、理解別、習熟別等で3段階以上の環境作りを準備する。	学習環境を準備するだけでなく、どのような環境が整い、どう利用するかを生徒にも理解させる指導を行う。	B	職員へのアンケート調査で、「個別に最大限対応する「学習環境づくり」はできたか」との問いに、77．3%が「できた」または「概ねできた」と回答している。目標は概ね達成できているが、さらに個に応じた指導を充実させるためには、この割合をもう少し上げる必要がある。	個別に最大限対応する「学習環境づくり」について、さらに研究していく。
		⑤　学習目標を達成できたかどうかを自己判定する「振り返り」の設定	毎時、及び、小単元毎に提示する。	振り返る場面を設定し、学習事項の習得への意欲を持たせ、授業外の指導につなぐ。	C	職員へのアンケート調査で、「毎時間の授業や小単元毎に「振り返り」の時間は設定できたか」との問いに、「できた」または「概ねできた」との回答は63．6%にとどまっている。また、生徒へのアンケート調査でも、「学習目標を達成できたかどうかの「振り返り」はできたか」との問いに、「できた」または「だいたいできた」との回答は47．0%にとどまっており、この割合をさらに上げる必要がある。	学習事項の習得への意欲を持たせ、授業外の指導につなぐためにも、「振り返り」の時間を必ず設定するようにする。

② 授業外の学習指導の改善

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●国語、社会、数学、理科、英語、音楽、美術、保健体育、技術家庭の学力向上	① 授業外に指導する生徒の絞り込み	最上位層、及び、下位層の生徒の絞り込みを、各学期（適時）行う。	成績と高校での実情をもとに、各教科で選び指導する。	C	職員へのアンケート調査で、「授業外に指導する生徒の絞り込みはできたか」との問いに、「できた」または「概ねできた」との回答は68．1％にとどまっている。個に応じた指導を行うためには、この割合をさらに上げる必要がある。	個々の生徒の成績や学習状況から、授業外に指導する必要のある生徒を絞り込み、授業外での指導につなげる。
		② 最上位層の伸長	最上位層の生徒の学力向上と授業における社会性の向上。	最上位層の生徒に対して、授業中の態度およびリーダーシップの取り方を実態に応じて指導する。	A	職員へのアンケート調査で、「最上位層の生徒の学力を伸ばすことができたと思うか」との問いに、100％が「そう思う」または「概ねそう思う」と回答しており、目標はほぼ達成できている。	最上位層の生徒に対しては、学力の伸長だけでなく、授業中の態度やリーダーシップのとり方についても指導する。
		③ 下位層の伸長	下位層の生徒の授業態度の活性化と学力の向上。	下位層の生徒に対して、学習のつまづきを解決させ、授業中になるべく解決する方法を個別に指導する。	C	職員へのアンケート調査で、「下位層の生徒の学力を伸ばすことができたと思うか」との問いに、「そう思う」または「概ねそう思う」との回答は68．1％にとどまっており、やや不十分である。	下位層の生徒を絞り込み、学習のつまづきを解決させるとともに、授業中になるべく解決する方法を個別に指導する。
		④ 家庭学習の方法の個別指導	3学期までに、生徒一人一人が自らに適した学習方法を見いだし、持ち帰る教材を選択する。	全生徒に、自己にふさわしい学習方法を見いださせるため、持ち帰る学習道具について、学年の発達段階毎に指導していく。	C	職員へのアンケート調査で、「家庭学習の方法の個別指導はできたか」との問いに、「できた」または「概ねできた」との回答は50．0％にとどまっており、やや不十分である。	生徒一人一人が自らに適した学習方法を見いだすことができるよう、個別の指導を徹底する。

③ 宿題の改善、及び、宿題までを含めた形成的評価の日常化

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●国語、社会、数学、理科、英語、音楽、美術、保健体育、技術家庭の学力向上	① 宿題における教師の役割の理解	宿題をやったかどうかをチェックすることではなく、宿題の問題ができるようになったかをチェックする役割を教師として果たしている。	宿題の定着について、宿題と宿題解決手段とに分けて考え、宿題解決手段は生徒ができていないときにチェックし、手段を検討するような教育実践をする。	A	職員へのアンケート調査で、「宿題に対する教師の役割を理解しているか」との問いに、86．3％が「できている」または「概ねできている」と回答しており、ほぼ目標は達成できている。	宿題に対する教師の役割については、来年度以降も常に意識し、宿題をやったかどうかではなく、その問題ができるようになったかを評価するようにする。
		② 宿題の内容の向上	全体に出す宿題の質を高くし、量は精選する。	授業における高レベル課題と連動した宿題を精選して生徒に出す。	B	職員へのアンケート調査で、「全体に出す宿題の質を高くし、量を精選することができたか」との問いに、72．7％が「できた」または「概ねできた」と回答しており、概ね目標は達成できている。	来年度以降も、宿題の内容の向上に努める。
		③ 最上位層、下位層対応の宿題の工夫	一斉の宿題以外に最上位層への長期的宿題や下位層への宿題解決手段を工夫する。	最上位層に本物の力を磨く長期課題を本人・保護者と相談しながら提案。また、下位層に対して、個別の宿題解決手段を面接等を通じて施す。	C	職員へのアンケート調査で、「最上位層や下位層に対応した宿題の工夫はできたか」との問いに、「できた」または「概ねできた」との回答は45．4％にとどまっており、やや不十分である。	一斉に出す宿題以外に、最上位層や下位層の生徒に個別に対応した宿題を工夫する。
		④ 宿題の定着の評価と指導	宿題が定着したかを評価し、定着していない生徒に個別に指導をする。	授業最初の5分評価、授業外での評価など、青陵中ならではの方法を計画し実践する。	C	職員へのアンケート調査で、「宿題の内容が定着していない生徒への個別指導はできたか」との問いに、「できた」または「概ねできた」との回答は54．6％にとどまっており、やや不十分である。	宿題の内容が定着したかを評価し、定着していない生徒に個別に指導をする。

④ 本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策
教育活動	●教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	ICT利活用教育の検証	・ICTを利活用した授業実践を毎週1回以上行う。 ・武雄高校とのWeb交流を3回以上行う。	・アンケートを実施して授業へのフィードバックを行い、ICTを利活用した授業の質の向上を図る。 ・武雄高校とのWeb交流を企画し、実施する。	A	職員へのアンケート調査で、「ICTを利活用した授業を行い、授業の質の向上に努めたか」との問いに、90．9%が「できた」または「概ねできた」と回答している。また、生徒への調査でも、「ICTを利活用した授業に興味を持って取り組むことができたか」との問いには90．8%が、「ICT機器の操作に慣れ、学習に生かすことができたか」との問いには91．6%が「できた」または「だいたいできた」と回答している。こうしたことから、ほぼ目標は達成できている。ただし、武雄高校とのWeb交流は2回実施したが、機器の不具合等もあり、今後の課題である。	授業の質の向上を目的としたICT利活用教育については、来年度以降も積極的に取り組んでいく。
教育活動	●心の教育	読書活動の推進	・豊かな心と高い志を育成するため、良質な本に数多く触れさせる。 ・図書館の年間貸出総数を8000冊以上にする。	・多数の教員による選書を通して、良質な本を数多く購入するとともに、学校だより等で生徒達に読ませたい本を紹介する。 ・2ヶ月に1回図書館だよりを発行し、図書館にある本を紹介して、生徒が図書館に足を運ぶようにする。 ・朝の読書で学級文庫を活用することによって、貸出冊数の増加を図る。	A	今年度の図書の貸出冊数は平成28年3月8日現在で8353冊、1人あたり23．3冊であり、昨年度の1人あたりの年間貸出冊数21．9冊に比べて増加している。また、2ヶ月に1回発行の図書館だよりを通して、職員のおすすめの本を紹介するとともに、図書館にもコーナーを設けるなどの工夫もできた。こうしたことから、ほぼ目標は達成できている。しかしながら、朝の読書の有用性は90%以上の生徒が理解しているものの、それが家庭での読書週間に結びついていない点が今後の課題である。	来年度以降も、豊かな心と高い志を育成するため、良質な本に数多く触れさせる。また、家庭での読書週間に結びつくような様々な工夫をしていく。
教育活動	●いじめの問題への対応	思いやりのある生徒の育成	・相手のことを考え、正しい判断や、行動ができるようにする。	・生活アンケートと教育相談を各学期に1回以上実施し、生徒の実態把握に努める。 ・いじめアンケートを月に1回実施し、いじめの未然防止に努める。	A	月1回程度の生活アンケートまたはいじめに関するアンケートを通して、いじめの早期発見、未然防止に努めることができた。また、教育相談を1学期に2回、2学期、3学期にそれぞれ1回実施し、生徒の実態把握に努めることができた。さらに、生徒総会で生徒会によるいじめ撲滅宣言も行うことができ、ほぼ目標を達成することができた。	いじめ等が全くない学校づくりをめざして、来年度以降も組織的に取り組んでいきたい。
教育活動	●健康・体つくり	望ましい生活習慣の確立	・3点（起床、学習開始、就寝）固定を定着させる。 ・朝食摂取率を95%以上にする。	・SDノート等を用いて生徒の生活実態を把握し、教育相談などを利用して適切に指導・助言を行う。 ・朝食の摂取状況について調査し、食育だよりや保健だより等で朝食の大切さについて呼びかけるとともに、保護者への協力を依頼する。	A	生徒へのアンケート調査で、「毎日規則正しい生活ができているか」との問いに、76．2%が「できている」または「だいたいできている」と回答しており、保護者への同様のアンケートでも77．6%が肯定的な回答をしている。さらに、朝食摂取に関しては、11月に2年生を対象として行った調査で、朝食を「必ず毎日食べる」との回答が95%あった。こうしたことから、ほぼ目標を達成している。	基本的な生活習慣の確立については、来年度以降もSDノート等を用いて生徒の生活実態を把握し、教育相談などを利用して適切に指導・助言を行いたい。また、引き続き食育だよりや保健だよりを通して食の重要性や健康への関心を高めていきたい。

4　本年度のまとめ ・ 次年度の取組

今年度のアンケート調査では、「本校に入学してよかった」とする生徒が95．6%、「本校に入学させてよかった」とする保護者が93．7%であった。この割合は、ここ数年90%を超えており、本校の教育活動が生徒・保護者・地域の期待にある程度応え続けてきていることの現れであると考えられる。しかしながら、今年度の評価項目のうち、特に学力向上という観点では、全体指導については概ね良好であるものの、個々の生徒へのきめ細かな対応という点でまだまだの部分も多く、こうした点の改善が来年度以降の課題である。

来年度以降も、本年度同様に学習指導方法の工夫・改善を目指し、上表中の達成度Cの項目について十分な検討を行っていきたい。そして、積極的なICT利活用を含めた本校独自の指導方法の完成を目指すとともに、多様な生徒が入学してくる中で全体的な学力向上を目指し、武雄高校に進学したあとも飛躍し、活躍する生徒の育成を目指したい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目